

Title	明治前期の読売新聞に見るロシア：平民のロシア観
Author(s)	Kraynyuk, Nadezda
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58800">https://hdl.handle.net/11094/58800</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	KRAYNYUK NADEZDA
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第70号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	明治前期の読売新聞に見るロシア — 平民のロシア観 —
論文審査委員	主査 教授 生田美智子 副査 教授 米井力也 副査 教授 武田佐知子 副査 教授 尾上新太郎 副査 広島市立大学 ミハイロバ・ユリア

## 論文の内容要旨

本研究の課題は、日本におけるロシア観を従来の先行研究において詳細に調べられているエリートの個人観という視点からではなく、一般人のロシア観の視点から考察することにある。いわば、日本におけるロシア観の問題を上からではなく、下から見ることである。

研究対象とする時代は明治前期で、具体的に言えば樺太千島交換条約が締結される明治8年（1875年）から日清戦争が勃発する直前の明治26年（1893年）である。

明治時代初期の庶民の世論を調べるために一番ふさわしい史料と思われるのは新聞、雑誌である。それらは世論を構成すると同時にそれを反映しているからである。特にそうであったのは中、下流向けの小新聞である。本研究の課題を達成するのに一番適している史料と思われるのは『読売新聞』である。それは明治初期において発行部数で10年以上も第一位を占め、日本社会の中流を読者としていたからである。

本問題をとらえるために、史料で見るロシア情報を分析し、ロシアイメージの発生の時点を定め、それがどんなロシア観だったか、その構成要因は何かを考察する。その後、学際的なイメージ研究のアプローチに基づいてその発生の理由について考察する。さらに、史料の収集、分析の結果として得たロシア観の特徴を際立たせるために、比較対象として、当時ロシアを横断し、自分の目で見たエリートのロシア観を使う。これらの旅人は榎本武揚、黒田清隆、福島安正という政治家・軍人と一般人の玉井喜作である。

本論文は序章と四つの章とまとめからなっている。序章では研究の意義、研究の趣旨、その課題、研究史料、研究方法と史料の限定と主な結論を述べた。1章ではイメージ研究とその主な特徴を紹介し、イメージ研究における定義の筆者による解釈を説明する。同章でロシア観の先行研究を分析し、それを基に徳川時代に存在したロシア観を整理した。2章で

は本研究の対象とする時代と主な史料として『読売新聞』を選択した理由を詳細に説明する。3章で研究対象とする時代にわたり、『読売新聞』のロシアに関する報道を紹介し、報道の性質をもとにこの19年間の時期を二つの時期に分ける。すなわち、明治8年から明治19年までの「非感情的な情報の時期」と明治20年から明治26年までの「感情的な情報の時期」二つの時期に分ける。次に、第一の時期、つまり「非感情的情報の時期」のロシア情報を三つの出来事の例で見、その特質を明らかにした。4章で、第二の時期、つまり「感情的な情報の時期」の情報を見、それを当時の旅行者の紀行に見る個人的ロシア観と比較し、『読売新聞』に見る敵としてのロシア観を考察し、その要素を説明した。そして、本研究の主な結論をまとめのところで叙述した。

本研究の結果、明治前期におけるロシア観の変形と特徴が見えてきた。主に強調したいのは次の事である。最初の時期はロシアに関する情報が少なかったが、それがどんどん増えてきた。研究対象とする時代全体にわたってロシアに関する情報は主に国際関係についてのもので、国内事情に関する情報は少なかった。その上、国際関係に関する情報は単なる事実の報道であることが多かった。情報の性質によって研究対象とする時代を二つの短い時代に下位区分することができると思われる。これらは明治8年から明治10年代の終わりまでの時代と、明治20年から明治26年までの時代である。その理由は次の通りである。

明治8年から明治10年代の終わりまで(1870年代後半～1880年代前半ごろ)においてはロシアに関する情報からはっきりとしたロシア観、あるいは感情的な色に染められているロシア観が見えてこない。情報はただ事実の報道が圧倒的に多く、そのため筆者はこの時期を「非感情的な情報の時代」と呼ぶことにした。これを証明するために、本稿の3章において当時の二つの重要な国際的な出来事がどんな風に解明されていたか考察した。この三つの出来事は明治8年に締結された樺太千島交換条約と同年に解決されたマリア・ルズ号を巡る事件と明治11年～明治12年の露土戦争である。三つの中からマリア・ルズ号の事件はほとんど無視されてしまった。樺太千島交換条約の方は日露関係にとっては大切なものであったのに、『読売新聞』の紙面にそれほど広く報道されなかった。この理由の一つは『読売新聞』はもともとから政治に関心を払っていなかったということにある。一方、読者はこの問題に興味を持っていた。当時の二つの投書がその証拠である。この投書の一つから分かるように、当時の日本の大衆の意見は二通りであった。第一は、投書を書いた人の条約に対する満足で、第二は投書の筆者が批判した不満ムードだった。平民に向けていた『東京絵入新聞』に出た情報を調べると、不満ムードがまったく見えず、「交換の祝詞」という記事が載っていた。日露関係の研究においては主に条約に対する不満ムードが強調されていることを考慮に入れれば、この事実は面白いと思われる。しかし、条約そのものについての気持ちはこの投書から見えても、ロシア観がはっきりとしない。

もう一つの出来事は露土戦争である。この出来事は当時のヨーロッパにおいて非常に大きな問題で、日本にも広く報道されていた。『読売新聞』の紙面に出た情報の大部分はイギリスからの情報であった。当時のイギリスのロシア観を考慮に入れると、はっきりとした否定的な報道が想像されるが、そうでもなかった。樺太千島交換条約に関する情報と同じように、情報そのものが完全ではなかったが、ロシアのはっきりとしたイメージもなかった。

しかし、明治20年代に入ってから、このような状態が変化し始める。以前と同じく、非感情的な情報はまだあるが、それと混ざって感情的な色に染められているものも掲載され始める。量的には、後者の方が少なかったが、感情が含まれる情報の方が読者に影響を与え、脳裏に残るので、この数少ない記事の方こそ『読売新聞』の読者にはじめてのロシア観を形成させたと思われる。このロシア観は警戒しなければならない国のイメージであった。

これは無定形、いわば多層的なもので、幾つかの要素からなっていた。それらはシベリア鉄道の建設、ニコライ皇太子の来日を巡る噂と西郷隆盛がシベリアで生き残ってロシアから帰国するという風説であった。ロシアを軍事偵察の目的で横断し、無事に日本へ帰国した福島安正に関する情報も間接的にこの「敵」としてのロシア観を強めた。シベリア鉄道に関する情報の中で三つのグループがあり、それらは中立的情報、ロシアに対する脅威を感じるような情報、シベリア鉄道の利益を論じた情報であった。その中で最後のグループが一番小さかった。

なぜ、10年間以上にわたってはっきりとしたイメージのなかったロシアという国が急に「脅威」・「敵」の姿で出てきたのか。これに対する答えはイメージ研究において探すべきである。それによると、国のイメージのルーツを探るときに、第一に、このイメージを持っている国の事情を見なくてはならない。本研究の場合にはこの「事情」が明治前期の日本の外交方針にあると思われる。最初のうちは、日本の国内政治も定まっておらず、政府も新聞もその目を国内事情に向けており、海外政治においては日本の位置が不安定で、ロシアと衝突するような利害がなかったのだ。だから、日本の大衆はロシアに対して特別な興味は持っていなかったといえよう。いわば、ロシアは当時の日本人の多くにとって「無色」の国であった。しかし、明治20年代に入ってから、日本の国内事情も変わり、国際社会における位置も変わり始め、国内のメディアはナショナリズムの方向へ移動し始めた。大陸におけるロシアの動きは日本にとって意味を持ち始め、ロシアは「無色」の本質を失い始め、「敵」の色彩が現れ始めた。

しかしながら、この時期に日本において存在していたロシア観は「敵」としてのロシア観のみであったというつもりはない。この問題はもっと複雑でもっと多くの史料に基づい

た深い研究を求めている。しかし、明治前期の一番大衆的な新聞であった『読売新聞』に出た情報の分析を元に判断すると、日本の大衆の認識に「敵」としてのロシア観の種が蒔かれたのは明治 20 年代からである。このイメージが大衆の認識においてしっかりと定着されたのは日露戦争の直前であったと推理できるが、そのルーツは日露戦争が始まる 15 年前から始まっていると本研究から分かる。

本研究の結果、明治時代の日本人のロシア観のもう一つの аспекトが明らかになった。これは今まで日露相互観の研究において研究されていなかった分野で、日本人のシベリア観である。明治 20 年代において『読売新聞』の紙面においてはシベリアに関する情報が多く、それを分析するにあたって、比較のため当時の三人の政治家のロシア横断の紀行文を考察した。それらは榎本武揚、黒田清隆、福島安正である。その比較の結果に次のことが分かった。日本の政治家がシベリアへ興味を見せ始めたのは 70 年代の半ばごろからであるが、一般大衆がシベリアを知るようになったのは 80 年代の後半～90 年代の前半からである。要するに、政治家より 10 年遅かった。政治家は二つの主なシベリア観を持っていた。これらは「恐ろしく寂しい土地」というシベリア観と「金穴」のイメージで、つまりさまざまな貿易の可能性をはらむ「豊かな土地」というシベリア観であった。これに対し一般の人々の認識にシベリアは主にシベリア鉄道の建設と福島安正のロシア横断という二つの側面から入ってきた、「警戒心の必要な土地」というイメージだった。貿易の可能性をはらむ土地としてのイメージは非常に弱く、殆どなかったとも言えよう。『読売新聞』に見るシベリア鉄道に関する情報はイメージ形成の主な原則（つまり、我々は見たいことだけを見る）の証言となる。明治 20 年代においてはシベリア鉄道の建設に関して様々な解釈が可能であったが、『読売新聞』に見るのは主に「脅威」としてのイメージである。

史料を分析した結果、明治時代の日本におけるロシア観の新しいアスペクトが見えてきた。すなわち、庶民がはっきりとしたロシア観を抱いた時期、その構成要素、その特徴などが明らかになった。そのことにより、さらに、日露関係の新しい側面が明らかになっただけでなく、本研究で得た結果が、イメージ研究の法則が有効であることを立証することで、イメージ研究に寄与することができたと思われる。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は明治前期の読売新聞にみる平民のロシア観を分析・記述したものである。論文は、以下の四章、序論、まとめ、参考文献で構成されている。

序論では研究の意義、目的、課題、時代的枠組み、使用史料、方法論的基礎が述べられている。本論文の目的は、読売新聞を資料として、平民がもっていたロシア観を、その発生と展開に着目して分析し、エリートのロシア観とどのように違うかを考察することにある。エリートと違い、平民のロシア観は記録が残っていないので、その分析を行うのは極めて難しい。執筆者はそれを当時の

新聞である『読売新聞』を材料に分析・記述している。このテーマ設定は、従来にはない視点で注目される。

第一章では、イメージの定義、イメージ研究の方法論、日本における先行研究、およびそれに見る江戸時代のロシアイメージが記述されている。先行研究が扱ってきたのは、エリートのロシア観であり、平民のロシア観をあつかったものはほとんどなかった。この点で本研究は未踏の分野に切り込んだものであり、高く評価できる。

第二章では、研究対象とする時代の枠組みが明治前期に設定され、研究史料としては「読売新聞」が選択される。すなわち、執筆者は樺太千島交換条約が締結された年（1875年）から日清戦争の前年（1893年）までに時代的枠を設定する。その理由は、平民の意識にロシアが入った時期であり、国民国家日本の意識が形成されはじめた時期であり、日清戦争勃発の前年で新聞がナショナリスト的な論調になりはじめた時期であるからである。従来ほとんど研究対象とされなかった時代で、あえてこの時代をあつかったのは評価できる。この観点からも本論文は新しい研究領域を切り開いたといえる。また、研究史料を読売新聞に限定したのは、研究対象とする時代全体にわたって存在している新聞で、読者層、発行部数、読者の反応反映度（投書）という基準に基づくものであり、理由づけが納得できる。「読売新聞」一紙に禁欲したことで、結果的には面白い事実の指摘につながっている。

第三章では、研究対象とする時代（19年間）が、情報内容の観点から「非感情的な情報の時代」（1875年から1886年にかけての12年間）と「感情的な情報の時代」（1887年から1893年にかけての7年間）にわけられ、前半の「非感情的な情報の時代」が分析・記述されている。この時代区分、ネーミングは執筆者が独自に考えたものであり、新聞報道に変化が起こったことを説得的に説明している。このようなロシア観の変化は先行研究でも認識されていたが、本論文ではそれがどのようなファクターにもとづいて形成されたのか、そのプロセスが分析されている。

第四章では、1887年から1893年にかけての時代、つまり、敵としてのロシア観が現れた「感情的な情報の時代」が扱われている。ロシアイメージの構造が分析され、それが多層的で、無定形なものであったことが指摘されている。日清戦争後の三国干渉以降、敵としてのロシア観が顕著になり、日露を戦争に導く要因となったことは従来も指摘されていたが、このようなロシア観が日露戦争の始まる15年も以前に胚胎していたことを指摘したのは、本論文が最初である。また、福島安正、榎本武揚、黒田清隆などエリートのロシア観と比較して、平民のロシア観の特徴を導きだしている。

以上のように、本論文は明治前期の平民のロシア観を、その発生、展開という流れにイメージ研究の原則を適応し、江戸時代のロシア観との連続と断絶、エリートのロシア観との比較、庶民の感覚・イデオロギーがどのように形成されたかという視点から記述・分析している。非感情的イメージが感情的イメージへと醸成されていくのがよく分る好感のもてる論文であるというのが審査員全員の一致した評価であった。日本人でも難しい明治前期の新聞を精力的に読

みこなし、表やグラフにまとめるまでに整理することができたのは、執筆者になみなみならぬ力量があったからであると考えられる。

本論文の執筆者は、『ロシアと東洋』と題したサンクトペテルブルグで出版された書物において「ロシアと日本」という章を分担執筆している。このことは、ロシアで同氏が日露関係史研究の代表的な一人として認められているということを示している。

本論文は今日注目されているテーマ、すなわち、他国のイメージを扱ったものである。イメージに関する分析・記述にはかなりの蓄積があるが、単にイメージの列挙に止まっているものが少なくない。イメージは、実体のないものであり、体系的・理論的な分析・記述が難しい分野である。分析にあたっては、どのような方法論を用いるかが大きなポイントとなる。執筆者はロシアイメージをその発生・展開において分析する歴史的方法とイメージ研究の原則を組み合わせ、分析した。これにより、はっきりとしたイメージのなかったロシアが急に脅威・敵の姿で出現したこと、およびその理由が説得的に記述されている。江戸時代に多様であったロシアイメージが敵のイメージに収斂していく流れを体系的・組織的に位置づけることに成功している。

周知のように、歴史研究で大事なことのひとつは、歴史的事実の掘り起こしである。本論文は、従来気づかれていなかった歴史的事実の掘り起こしをかなり行っている。たとえば、明治前期に、シベリアのイメージが発生したこと、当初はロシアとシベリアが別のもので認識されていたこと、樺太千島交換条約は従来の研究では日本国内が一致して不満であったように記述されてきたが、歓迎する新聞記事もあったことなどを指摘している。執筆者が用いた理論的枠組み（歴史研究の方法とイメージ研究の原則を組み合わせたもの）は、新しく掘り起こされた歴史的事実をも十分に説明できる適用範囲の広いものである。

もとより、本論文にも、いくつかの問題点、今後に残された課題は存在する。たとえば、審査委員から下記のような意見がだされた。第一に、ナロードニキやニヒリズムへの言及が欠如している。たとえ文面にはロシアという言葉がなくとも、自由民権運動や爆弾事件という文言だけでもロシアイメージを喚起することが配慮されていない。第二に、西郷隆盛の不死鳥伝説とロシアの脅威の結びつきはもっと展開してもよかったのではないか、第三に、ロシアとシベリアが別のもので認識されていたという興味ぶかい事実の指摘があったが、それ以上の展開がなされていない。最終試験において指摘された以上の指摘を執筆者は今後の課題と受け止めているので、それが補充されれば、さらに説得力のあるものになるであろう。

日露において本格的な研究がほとんどないテーマにとりくみ、明治時代の新聞を渉猟し、その結果を表やグラフにまで整理し、新たな視点を導入した著者の研究姿勢は高く評価される。

今後に残された課題は存在するが、それは執筆者の今後の研究の新たな可能性を示唆するものであり、本論文の価値を損なうものではない、

これらのことを総合的に判断し、博士論文審査委員会は一致して、本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であるとの結論に達した。